



The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

Vol.6, 2008.

日本赤十字看護学会

NEWS LETTER

日本赤十字看護学会ニュースレター 第6号 2008年12月発行

— 1



赤十字の関心には際限がなく、すべての人間に及びます。人間は互いに共通の性質を持つ同胞だと考えるからです。

解説 赤十字の基本原則 人道機関の理念と行動規範 (ジャン・ピクテ著/井上忠男訳、P43、東信堂)より

◀ 地震救護活動を行う日本赤十字社の医療要員 (2005年 パキスタン) 日本赤十字社

理事長挨拶

日本赤十字看護学会 理事長 新道 幸恵

平成20年度の総会は、第9回学術集会の大会長奥野茂代先生のご配慮によって、京都の橘大学の清優館において活発な議論のもとに無事終了いたしました。

今年度の総会で、理事2名の増員と名誉会員として松木光子氏を承認し、第11回の学術集会長に石井トク氏(北海道赤十字看護大学)を決定いたしました。理事2名の増員は、本学会の活動を看護の学術学会として、また日本赤十字の特性を発揮できる学会へと発展するために必要と考えたことによります。看護の学会としての活動には、看護系学会の会員団体としての活動と、昨年度に世界看護科学学会の発足が計画されたのを機会に、その会員団体となったことがあります。日本赤十字の学会活動としては、前年度に発足させた国際活動委員会で、世界の赤十字の看護教育機関や学術集会との連携を開始することを目標に調査をすることにしました。さらに、今年度は、災害看護活動委員会を発足させることを総会に提案し、認められました。以上のように、時代の変革と共に、看護の学会活動の活発化と共に、本学会も独自に活動の幅を広げてきました。それらの活動を継続させ充実させるためにも、理事の増員が必要になってきました。

この理事の増員は、次期役員の改選に於いて実現することになります。具体的には、今年度の評議員選挙を経由して行われる理事選挙時に10名の理事が選ばれることとなります。

来年度は、本学会発足後10周年に当たります。この記念事業の準備を今年度事業に加えることも総会で承認いただきました。これから本格的に企画を行うこととなります。本学会の設立趣旨を思い起こし、これまでの10年間の事業を振り返ることで、変革の時代における学会のあり方を考え、今後10年間の活動の方向を決める良い機会にしたいと考えています。会員の皆様の企画案をお待ちしています。

本学会は看護の現場で活躍する会員の方々が多いというのも特徴です。その方々にとって、魅力ある学会にし、継続的に会員として所属していただける学会にすることが課題であると考えています。ご要望などをお聞かせいただければ幸いです。

会員の皆様のご活躍とご健勝をお祈りしています。

平成21年度は
日本赤十字看護学会が
発足して10年目を迎えます。

第1回 災害看護セミナー
(日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会主催)
が開催されます。

学会の過去を振り返り未来へ発展する
節目として、10周年記念事業を実施いたします。

日 時：平成21年6月19日(金)午後～
(第10回 学術集会 前日)
事業予定：10周年記念講演、シンポジウム等
詳細が決定次第、順次ホームページに
アップしてまいりますのでご覧ください。

災害看護の発展のためにもっとよく知ろう! DMATと赤十字救護班

日 時：2008年12月6日(土) 13:00～16:30
会 場：日本赤十字看護大学広尾ホール(渋谷区広尾4-1-3)
基調講演 災害看護の動向と課題 講師：新道幸恵氏(日本赤十字広島看護大学学長)
シンポジウム
災害急性期においてDMATと赤十字救護班はいかに協働できるか
— 医師および看護師の立場から経験知と提言 —
シンポジスト：大友 康 裕氏(東京医科歯科大学救急災害医学教授/ERセンター長)
勝 見 敦氏(武蔵野赤十字病院救命救急センター副部長)
佐 藤 和 彦氏(国立病院機構災害医療センター看護部長)
板垣知佳子氏(日本赤十字社医療センター看護部長)

HP：http://jrcsns.umin.ne.jp/image/saigaikango_01.pdf

寄稿文

先輩から伝えられ、伝えたい看護

滋賀県看護協会 会長 藤井 淑子

日本赤十字看護学会で、お話をさせていただく機会を与えていただいたことにより、看護師として働いてきた40年余を振りかえることが出来ました。

強い動機もなく看護師になるなら赤十字の看護学校が良い、と薦められて、入学しました。学生時代は、先生や先輩から「『看護』というのは『手』と『目』で護ると書くでしょう。患者さんを一人の人としてしっかり観て、熟練した技術で護るのよ」また、「看護実践に大切なのは『3H』 Head Hand Heartの三つ、この三つがバランスよく整えて看護することが大切」と、看護の基本的となることを絶えず聞かされていたことでした。その意味の深さや・大切さを自分の中にしっかり取り込み、意識して患者さんに向かうようになったのは、先輩看護師との出会いでした。黄疸で皮膚の掻痒から、患者さんの手が引っ掻きそうになる一瞬前に、冷たい、時には暖かいオシボリが、ピツタと痒い部分に当たるそして、傷の出来るのを防ぐ。また、痰が切れにくいとき、術後の傷が開かないように、咳嗽の瞬間傷口を寄せるように両手で押さえる。そのタイミングと手の動きを見たとき、これが『手』と『目』で護るといことだと教えられました。

もう一人の、癌性腹膜炎で入院された看護の先輩は、おなかの張りが強くなってきたとき、『おなかが張ったとき、メント水をお湯に入れて暖かくしたタオルを腹部に当て腸の蠕動方向にゆっくりマッサージをしてもらう。そして1個でもガスがでるとその一瞬楽になるの』とマッサージをするときの強さ、速度等「そんなにイライラしてマッサージすると、患者までイライラが伝わる」「強すぎると痛みを感じる、そうそうそれくらいの力で、ガスが出てくれるようにと祈る気持ちをこめてするの」とそして、小さなガスが、「ブー」と出ると「少し気持ちだけでも楽になったわ、貴方も頑張ってくれてよかったわ」と自分の体を通して教えてくださいました。このような場面を思い出すとき先輩・同僚・後輩そして、患者さんから、実践の中で多くの技術や心を学ばせていただきました。看護実践と共に、赤十字の看護としてもう一つ大切なこととして、看護の主体性ということでした。深夜勤の申し送り3日排便の見られない患者さんを記録から見つけ、新卒間もない私は、其のことに気がついたことを自慢のように報告したとたん、師長から、「それで貴方は看護婦として何をされたの」と問われて、つい緩下剤などに頼りがちな自分に気づかされました。先ず看護として何を行うべきかをしっかり考えること、看護師としてやるべきことは何かを学びました。このようなことは、学生、新人時代絶えず、『どうして?』『何故?』『貴方はどのように考える?』とたえず問いかけられたことです。先輩たちは安易な妥協をすることなく、看護師としての発言をしっかりとされていました。

今の現場は本当に厳しく、仕事を終えて先輩の看護への思いや、経験を、聞く機会もなくなってきたように思います。そのような中、忙しさにおわれて大切なものが、忘れ失われていくことが無いよう、これを機会に身近なところで、つたない経験を語ってゆきたいと思っています。

次代を担う赤十字の看護

関西福祉大学 倉田 節子

赤十字を離れて5年目になる。今、私の手元には赤十字の社内報である「赤十字の動き」がある。もうかなり昔の号であるが、ここに永年勤続表彰を受けた各地の赤十字施設に勤務する職員のメッセージが紹介されており、この私も勤続20年を迎えた思いを掲載させていただいた。

その頃は、看護学校の専任教師として無我夢中で過ごしていた。現在は、大学と場所は変わったが、相変わらず悪戦苦闘しながら、担当している小児看護学では「子どもとその家族の最善の利益を守る」ことを前提に、さまざまな状況にあり、成長発達している子どもと家族の看護が考えられることを目指している。

現代においては、少子化・核家族化、女性の社会進出に伴い、家族構成の変化、育児に対する不安・負担が大きいなどの課題がある。また、児童虐待や青少年犯罪、いじめ、ひきこもり、さらには子どもが被害者となる事件・事故の多発など子どもをめぐる問題が深刻化している。また、こうした子どもと家族の問題を地域で受けとめ解決する力が低下しているとの指摘もある。一方、病気をもつ子どもを取り巻く療養環境は、医療の進歩による疾病構造の変化や重症化、小児病棟の縮小化、在院日数の短縮化、情報の氾濫など子どもや家族だけでなく、医療者にとっても複雑なものになっている。

このような中で、子どもを尊重し、成長発達を促す関わりや、その子どもや家族の力を発揮できるような支援が看護職者に求められている。子どもは、年齢や健康レベルを問わず、権利を有し行使することができる主体であり、どんなに小さくてもその子がわかる方法で説明し、子どもなりに納得できるような関わりが必要である。子ども自身が「やってみよう」と治療や検査に前向きに取り組み、「頑張れた」という達成感が得られるような関わりを学生に伝えたいと日々思っている。

ここで、「最善の利益を守る」とはどういうことかを考えると、基盤になるのは「人権の尊重」であり、これこそが赤十字の看護において重要とされていることだと思っている。いつどんな状況であっても人権を尊重することや、誰にとっても最善の利益とはどういうことかを追求すると現実問題としては困難なことも多いだろう。しかし、「最善の利益を守る」ことのできた看護実践を客観的な方法として明確化することが大切であり、それは看護を学ぶ立場の学生の「最善の利益を守る」ことにつながるのではないだろうか。学生が「やってみよう」「頑張れた」という気持ちになれるような看護を伝えていきたいと思う。

トピック

災害看護活動委員会の発足

災害看護活動委員会 委員長 前田久美子

災害看護活動委員会は、赤十字の災害看護に関する活動を行うために平成20年度に新しく立ち上げられました。災害時の救護業務は日本赤十字社の使命であり、長い歴史のなかで国内外におけるさまざまな災害看護活動が展開されてきました。さらに赤十字教育施設および医療施設においては、災害現場で活動しうる救護員としての赤十字看護師の育成を継続的に行っています。こうした経験豊富な赤十字の災害看護に関する知識や実践を掘り起こし経験知を共有し、赤十字災害看護の発展に資するために活動することを災害看護活動委員会の目的とします。

活動のスタートとして本年度は、①赤十字における災害看護の掘り起こしのための情報収集、②赤十字災害看護教育についての情報収集、③災害看護活動体験者および教育者による情報共有の場づくりを行い、経験知の共有化を図ります。

具体的には、全国赤十字医療施設における災害看護に関する実態調査、赤十字教育施設における災害看護教育に関する実態調査、講演&シンポジウムを予定しております。会員の皆様に赤十字の災害看護をもっと知ってもらうための基礎づくりを行ってまいります。会員の皆様のご協力とご参加をよろしくお願いいたします。

委員長 前田久美子(大森赤十字病院)

委員 小原真理子(日本赤十字看護大学)

谷岸 悦子(杏林大学)

小林 洋子(日本赤十字社幹部看護師研修センター)

日本看護系学会協議会の活動について

日本赤十字看護学会 副理事長 守田美奈子

日本看護系学会協議会(以下協議会と略す)には、現在33の学会が所属しています。協議会は看護の学術的な発展のために組織化されましたが、発足の経緯や目的につきましては、すでに昨年のニュース・レターでご紹介いたしました。協議会では、総会の開催、シンポジウムの開催やニュース・レターの発行、ホームページの刷新、日本学術会議との連携などの活動を行っていますが、今回はシンポジウムのことを少しご紹介します。

毎年開催される公開シンポジウムでは、看護学が直面している重要課題を取り上げて議論しています。第8回シンポジウムでは、「ICT(Information and Communications Technology)を活用した看護イノベーション」というテーマが取り上げられました。

病院では、電子カルテの導入が進みつつあります。電子カルテによって情報が見やすく、また共有できるようになるなど、よい面もたくさんあります。しかし、一方でコンピューターばかり見て、患者さんの顔を見て話さない、あるいは身体に触れることが少なくなったなどの声もよく聞きます。このようなICT化の負の側面への対応も考えていくことが重要です。シンポジウムでは、ICT化による弊害も含めて、ICTのもつパワーを有効に生かしつつ、看護の質を高めるための戦略について話し合われました。

第9回(平成20年)のシンポジウムは、「看護の役割拡大にむけてのイノベーション」というテーマでした。この問題に関連して、看護の裁量権の拡大にかんする緊急会議が2007年10月20日(土)に日本学術会議看護分科会と看護系学会協議会との共催で開かれました。看護の裁量権の拡大は、これ以降も継続的に協議会でも検討されるようです。

ICT化の問題や看護の役割拡大など、協議会では今日的なテーマを取り上げシンポジウムを行っています。それぞれ日常臨床の場面で、会員の皆様も一度は疑問に思われたり、問題意識を抱かれた課題ではないでしょうか。このような課題について、日本赤十字看護学会としても協議会の会員として、皆様のご意見を伺いながら検討していきたいと考えております。

第9回 日本赤十字看護学会学術集会を開催して

第9回 学術集会長 奥野茂代 (京都橘大学)

2008年6月14日(土)・15日(日)に京都橘大学を会場に第9回日本赤十字看護学会学術集会(以下、本学術集会)を開催いたしました。幸い梅雨の晴れ間で開催2日間共に爽やかな良い天候に恵まれ参加者は、全国から日本赤十字看護学会会員、日本赤十字医療機関・教育機関、さらに京都府下の保健医療福祉機関の看護関係者など約350名でした。

第9回学術集會会長を務めるように、2006年度の総会でご指名を受け、非才を承知の上でお引き受けいたしました。この時私は、前任校である長野県看護大学に所属しており、赤十字の組織から離れて約11年経過しておりました。また2009年には、長野県看護大学を定年退職し4月から京都橘大学に所属することになりました。

したがって本学術集会を開催するにあたっては、まず京都橘大学の了解を得ること、赤十字出身の同僚、担当の老年看護学領域の教員の協力をえることから開始しました。幸いにも京都橘大学の田端泰子学長、前原澄子学部長の力強いご支援をいただき、また同僚や領域の教員からも快諾をえて始動、また日本赤十字京都府支部、京都第一赤十字病院、京都第二赤十字病院、舞鶴赤十字病院の看護部、京都府看護協会の皆さま、大学の教職員など多くの方々のご支援・ご協力をいただき順調に開催の運びへと日々を重ねることができました。

本学術集会は、わが国の伝統ある日本赤十字社における看護教育および看護実践の質向上をめざしたものであり、お引き受けしたからには充実した意義ある学術集会にしなければとテーマの選択に悩みました。しばらく赤十字を離れていたために、やはり現在取り組んでいる老年看護学領域にしようと「認知

症の人と家族のくらしを支える看護を考える」をメインテーマに決定した次第です。認知症高齢者へのケアの推進は、すべての高齢者や各世代を対象にした看護に通じるものであり、今後の看護ケアを展開する指針を探求することにつながるとも考えました。

シンポジウムでは、「認知症の人と家族のくらしを支える看護を考える」を企画し、介護者の多様なストレスとその影響、またストレス対処に関する看護支援について検討できました。テーマセッションでは「認知症高齢者・家族と紡ぐケア」「専門看護師の導入・定着に向けた取り組み」「急性期病院における認知症看護認定看護師の活動と課題」「個別化された標準化看護にむけた看護と情報」「赤十字における魅力ある学校づくり」など5つのテーマで、また交流セッションでは「国際救援・国際協力における赤十字看護師の活動」「赤十字の看護を語る一伝えたい看護、創りたい看護」の2テーマで、それぞれ活発な討議が行われました。また恒例の学会研究活動委員会主催「質的研究の計画書を書く」も、充実した内容に満足度も高い状況でした。学会員からは67演題と広範囲な活動成果が研究報告されました。これらは、日本赤十字看護学会に相応しい内容であり、日本赤十字の組織内にとどまらず広く今後の看護実践や看護教育への示唆、発展の契機つくりになったと確信しております。

参加者のアンケート回答には、会運営や大学へのアクセスについて苦言もありましたが、内容的には満足というものが多く、ご参加いただいた皆様、企画委員、実行委員、京都橘大学の教職員、学生の皆様のご尽力の賜物と心から感謝申し上げます。

第10回 日本赤十字看護学会学術集会のご案内

第10回 学術集会長 守田美奈子
(日本赤十字看護大学)

2009年6月に東京、広尾の日本赤十字看護大学で第10回学術集会を開催致します。

今回のメイン・テーマは、「語ろう 看護の夢」です。10年前に本学の前学長、樋口康子先生が理事長として赤十字看護学会を発足されてから10年。ちょうど記念の年に広尾で学術集会を開催させていただきますことに感慨を覚えます。

医療現場では電子カルテなどIT化の進展や診断・治療技術の進歩など環境変化が著しく、看護が担う役割も急激に変化しています。それだけでなく、在院日数の短縮化に伴い、さまざまな検査や治療が外来に移行し、病院での治療やケアの様相が急激に変化しつつあります。治療や療養の場は、病棟や外来、家庭などと広がっており、それにつれて看護にも新たな機能や役割が加わり、看護は大きな変化を余議なくされています。

この変化に対応することはとても大変です。それについていけず、あるいは自分の行っている看護に疑問をもち苦しんでいる看護職も多いと思います。いろいろな悩みに耐えきれず、心なくも現場を離れた新人の率も高くなっています。看護にとって危機ともいえる状況です。しかし、通常、危機は変革や成長のチャンスを孕んでいるとも言われます。苦しさの中から、新たな変革を生み出す原動力、それは看護を「語る」こと、そして「夢」をもつこと、つまり、夢を語れるような状況になれることではないでしょうか。

そこで、本学術集会では、「語る」と「夢」をキーワードにしました。「語る」ことで得られるパワー、「夢」をもつことで得られるエネルギー。学術集会では、看護の現状や自分たちが求める看護、これからの看護の方向性など看護への夢を語りあいたいと思っています。そのためには、まず看護の悩みや葛藤、看護への思いを互いに語ることが大切だと思います。苦しみを語るなかで、新たな夢や希望が生まれてくるのではないかと思います。本学術集会のメイン・テーマ「語ろう 看護の夢」には、このような思いが込められています。

学術集会では、本学学部長 川嶋みどり先生に教育講演をお願いしております。招聘講演も企画中で、現在講師の先生と交渉中です。テーマ・セッションは、先の趣旨に応じた今日的な看護の課題を取り上げる予定です。会員の皆様方には、日頃の研究成果や実践活動をできるだけたくさん発表していただきたいと願っております。参加者同士で活発な意見交換をすることで、新たな看護への発見ができることを期待しております。学会に参加して元気になった、明日からまた看護をがんばろうと思えた、と感じていただけるような学会にしたいと思っています。

緑豊かな広尾地区で、統合大学として新しくなった校舎で皆さま方をお迎えしたいと思ひます。ぜひ多くの方々にお越しいただけますようご参加をお待ちしております。

平成21年度研究助成のお知らせ

本学会では、学会員に研究費用の一部を助成しています。

【応募資格】研究代表者が2年以上の会員歴があること、共同研究者が申請時に会員であること。

【助成金】研究1題について30万円を限度として交付

【応募期間】平成21年2月1日から2月28日まで

詳しくは本学会のホームページをご覧ください。

「世界看護科学学会」の発足について

「世界看護科学学会」の発足が計画され、日本赤十字看護学会はその会員団体となりました。第一回世界看護科学学会学術集会(The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science)は、テーマをTowards creating a new domain of nursing knowledgeとして、平成21年9月神戸にて開催予定です。

ぜひ、日本赤十字看護学会の皆様も参加と演題登録をお願い申し上げます。

ホームページのアドレスは <http://wans.umin.jp/index.html> です。

学会誌10巻1号からの投稿論文について

「随時受け付け」といたしました。皆様のご投稿、お待ちしております。

学会誌について、平成21年度から年2号を刊行していきます。今まで投稿期限を設けていましたが、今後は随時受け付け、順次査読をし、採否を決定していきます。

10巻1号：平成21年7月末刊行予定

10巻2号：平成22年1月末刊行予定

執筆要領、投稿先は、<http://jrnsns.umin.ne.jp/O501.html> をご覧ください。

NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.6, 2008.

日本赤十字看護学会ニュースレター 第6号 2008年12月発行

●発行 日本赤十字看護学会 広報委員会

愛知県豊田市白山町七曲12番33 日本赤十字豊田看護大学内
FAX 0565-37-8558

●学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。

<http://jrnsns.umin.ne.jp>

●学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

sugiura@rctoyota.ac.jp
skobayashi@rctoyota.ac.jp までお願いします。

●編集後記

皆様のご協力を賜り、第6号ニュースレターを発刊することができました。平成19年度から日本赤十字看護学会会員にUMIN IDとパスワードが配布されております。これにより、電子メールや会員用掲示板を利用することができます。皆様のご意見をお寄せください。利用についての説明は、<http://jrnsns.umin.ne.jp/members.html> で確認できます。また、学会誌検索 <http://jrnsns.umin.ne.jp/journal.html> も可能となりました。どうぞご活用ください。